

留学記念エッセイ

大森 怜於

はじめに

この度は、西元慶治先生、八重樫牧人先生をはじめ、Nプログラムの先生方・関係者の方々のお力添えにより、念願であった米国臨床留学を始めることができますことを深く感謝申し上げます。

私は滋賀県大津市で生まれ育ち、2019年に京都府立医科大学を卒業いたしました。その後、神戸市立医療センター中央市民病院で初期研修を行い、北野病院、大阪市立総合医療センターで腫瘍内科専攻医として勤務いたしました。現在は再度神戸中央市民病院でスタッフ医師として勤務しており、気付けば計7年間医師として勤務し、5年間は腫瘍内科医として研鑽を積んできたということになります。

渡米するタイミングは少し遅くなってしまいましたが、この間には日本でないとはできなかった経験や出会いがたくさんありました。たくさんのご指導を賜りました指導医の先生方への感謝は絶えない一方、優秀な後輩医師たちにも恵まれ、非常に有意義な日々を過ごすことができたと考えております。特に後輩の先生方とはまたいつかアメリカで一緒に働けることを夢見ております。

出身地 滋賀県 大津市について

滋賀県と聞いて、皆さんは何を思い浮かべるでしょうか。私自身には少々信じがたいことですが、関西以外の出身の方の中には、その位置がすぐには思い浮かばないという話を耳にし、驚いたことがあります。

滋賀県といえばまず琵琶湖を連想される方が多いかもしれません。しかし、琵琶湖は県全体の面積のうち約 6 分の 1 を占めるに過ぎず、その周囲には多様な魅力的な風景や文化が広がっています。

なかでも私が最も惹かれているのは、この土地が育んできた長い歴史です。古来より日本の中心であった京都や大阪に隣接する地理的条件のもと、滋賀は幾多の人や物資が行き交う要衝として、数多くの歴史の舞台となってきました。

私の出身地である大津市瀬田には古くから瀬田の唐橋がかかっており、とりわけ交通の要衝となってきました。古くは日本書紀にもその記載があり、672 年の壬申の乱では最大の決戦地となったと伝えられています。弘文天皇率いる朝廷軍と大海人皇子（のちの天武天皇）の軍勢が橋を挟んで対峙し、この戦いに勝利した大海人皇子がそのまま勝利を収めたとされています。

その後も源平合戦や承久の乱でも戦場になり、戦国時代には、「唐橋を制する



ものは天下を制す」とまで言われるほど重要視された拠点となりました。諸説ありますが武田信玄も死の淵に際し、「我が軍旗を唐橋に立てよ」と言ったと伝わっております。

東海道線（琵琶湖線）から瀬田川・琵琶湖を望む。水道橋の奥には比叡山（左手前）、比良山（右奥）が見えます。現在は唐橋以外にも鉄道・高速道路・国道の橋が架かりますが、いずれも通勤時間帯には混雑や渋滞が絶えません。

余談ですが、「急がば回れ」ということわざも、この瀬田の唐橋が由来です。「もののふの 矢橋の船は速けれど 急がば回れ 瀬田の長橋」という短歌が知られており、比叡おろしが吹き下ろす危険な琵琶湖を近道で行くよりも、地に足をつけて瀬田川を回る方が安全で最終的には早いというのが、このことわざの語源です。私自身もこれまで受験、医師生活、留学準備など何かにつけて「急がば回れ」という言葉の意味を実感してきました。アメリカ生活でも横着せずに故郷の風景を思い出しながら着実に努力していこうと思います。

米国留学を目指すまで

この交通の要衝としての地の利を活かし、私は小学校には京都へ、中学・高校には奈良へ通い、大学は再び京都へ進学しました。医師になってからも大阪、神戸と関西各地を飛び回り、多くの経験と出会いに恵まれてきました。米国で働きたいと思うようになった明確なきっかけは、正直なところ自分でもよくわかりませんが、そうした環境の中でさまざまな刺激を受けるうちに、次第に海外で、特にアメリカで学びたいという思いを抱くようになりました。

学生時代には友人たちと海外旅行をする中で、いつか海外生活を送ってみたいという漠然とした憧れを持っていました。また、京都府立医科大学で受けた授業の中で特に印象に残っている話があります。明治初頭、他大学に先駆けて医学教育を開始した母校では、当初「お雇い外国人」として招かれた海外の医学教師によって教育が始まったというものでした。当時の私は医学の内容とあまり関係ない話題でもあり、半ば聞き流しておりましたが、医学を学ぶにつれて、現在

私たちが日本語で不自由なく高度な医学教育を受けられるのは、先人たちが海外から吸収し、日本での教育体制を構築してきたからに他ならないと感じるようになりました。その一方で、これだけ高度な教育・医療体制があるにもかかわらず、英語力や研究環境などの問題もあり、残念ながら海外に遅れを取っている分野があることにも、もどかしさを感じるがありました。

研修医時代、何かと収集癖のある私は、友人が USMLE を受験しているのを見て、「日本の医師免許以外の資格も取ってみよう」くらいの気持ちで勉強を始めました。日常業務が多忙であったことや、また当時はアメリカで働く明確な将来像持っていなかったため、取得に少し時間がかかりましたが、いざ ECFMG certificate を取得すると、せっかくならアメリカで挑戦してみたいという気持ちが次第に強くなりました。

また私の専門である腫瘍内科という分野は日本国内では十分に普及しているとは言い難い一方、アメリカでは古くから主要な内科の一分野として確立されています。「お雇い外国人」に学んだ先人たちや、留学して知識を深めた過去の偉人のように、私自身もアメリカで腫瘍内科を学び、いつか日本に還元したいと考えるようになりました。

留学を前にして

英語で臨床を行うことはもちろん、生活面でも初めてのことばかりであり、不安が多いのが正直なところです。しかしその一方で、日本でしかできないことを今のうちに思い切りやっておこうとも考えております。レジデント期間中にトラブルがあってはいけないと思い、日本にいるうちにと考え、まずは親知らずの抜歯を行い、実際このエッセイも片頬を腫らしながら執筆しております。

ここまでこのエッセイを読んでもくださった方は薄々お気づきかもしれません

が、私は学生時代より日本史が好きで、特に実際の史跡が数多く残る幕末・維新、そして、その後の近代史に強い興味を持っておりました。そのため、長期休暇には日本各地の史跡を鉄道で巡ることが最近の楽しみになっています。

さらに、私が腫瘍内科レジデントとして勤務した大阪市立総合医療センターで大変お世話になり、アメリカ留学も応援して下さった秋吉先生が筋金入りの戦国武将好きであったこともあり、次第に戦国時代にも興味を持つようになりました。ここでも収集癖を発揮してしまい、最近は「日本 100 名城スタンプ」のコンプリートを目指しております。しかし、現時点で未だ集めたスタンプは 30 ほど。渡米を前に急ピッチで城郭巡りに全国を飛び回っております。

そうして各地を訪れる中で、改めて気づいたことがあります。私の出身地である滋賀県は、古くから交通の要衝であり、同時に軍事上の重要拠点でもあったため、多くの城跡があります。壮麗な天守を今に残す城もあれば、遺構はわずかでも歴史的に非常に価値の高いものまでたくさんあります。その中から特に皆様にぜひ訪れていただきたい城をご紹介しますと思います。

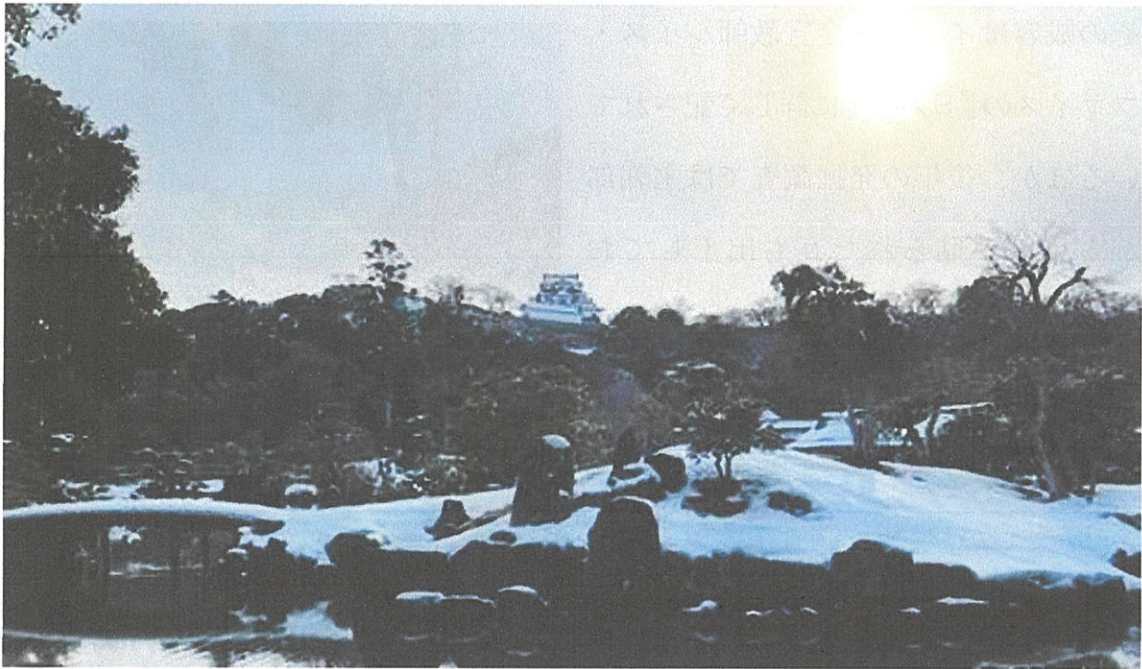
滋賀の名城

・彦根城

全国に12基しか残っていない現存天守の一つであり、国宝にも指定されています。ゆるキャラブームの火付け役となった「ひこにゃん」でも知られ、言わずと知れた滋賀県の名所です。

徳川家康の側近として仕え、「徳川四天王」の一人である井伊直政は、関ヶ原の戦いで武功を上げたこともあり、現在の彦根周辺の地域を与えられました。この時点ではまだ豊臣家も存続しており、大坂での戦いも見据える中、中山道と北国街道が交差し、さらに琵琶湖水運の拠点でもあった彦根に城が築かれました。

その後も井伊家は譜代大名の筆頭として徳川幕府を支え、四人の大老を輩出しました。中でも最も有名なのが、幕末の大老である第13代彦根藩主 井伊直弼ではないでしょうか。直弼が青年時代を過ごした「埋木舎」は今も彦根城下に残されています。直弼は安政の大獄や、勅許を得ないまま日米修好通商条約に調印したことなどから、強硬なイメージが持たれやすく、実際に攘夷派によって桜田門外で暗殺されてしまいました。しかし、当時の国際情勢を考慮すると、日本が鎖国を維持し続けることは極めて困難だったとも考えられます。実際、地元彦根では「開国の恩人」として評価する声も根強くあります。少し論理が飛躍するかもしれませんが、私がこうしてアメリカ留学に挑戦できるのも、この時に開国という決断をしたからこそなのかもしれません。



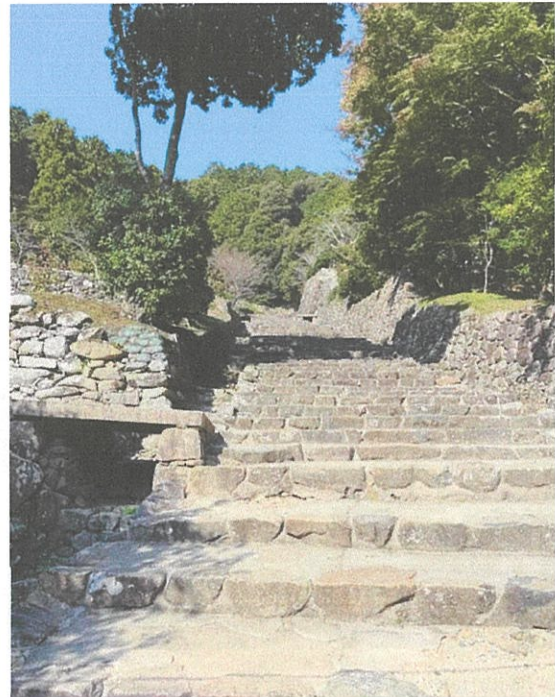
彦根城内の庭園「玄宮園」から見える天守閣。四季折々の景色が楽しめます。

・安土城

1575年、長篠の合戦で武田勝頼に勝利し、さらに越前一向一揆も鎮圧した織田信長は、天下布武の拠点として翌年1576年に安土城の建設を開始しました。わずか三年で完成した姿はその城は、安土山全体を石垣で覆い、山頂には黄金に彩られた高層天守を備える、それまでに類を見ない豪華絢爛な城であったと伝えられています。しかし完成からわずか3年後の1582年、本能寺の変が起こると、その後火災が発生し焼失してしまい「幻の城」となってしまいます。一方で、

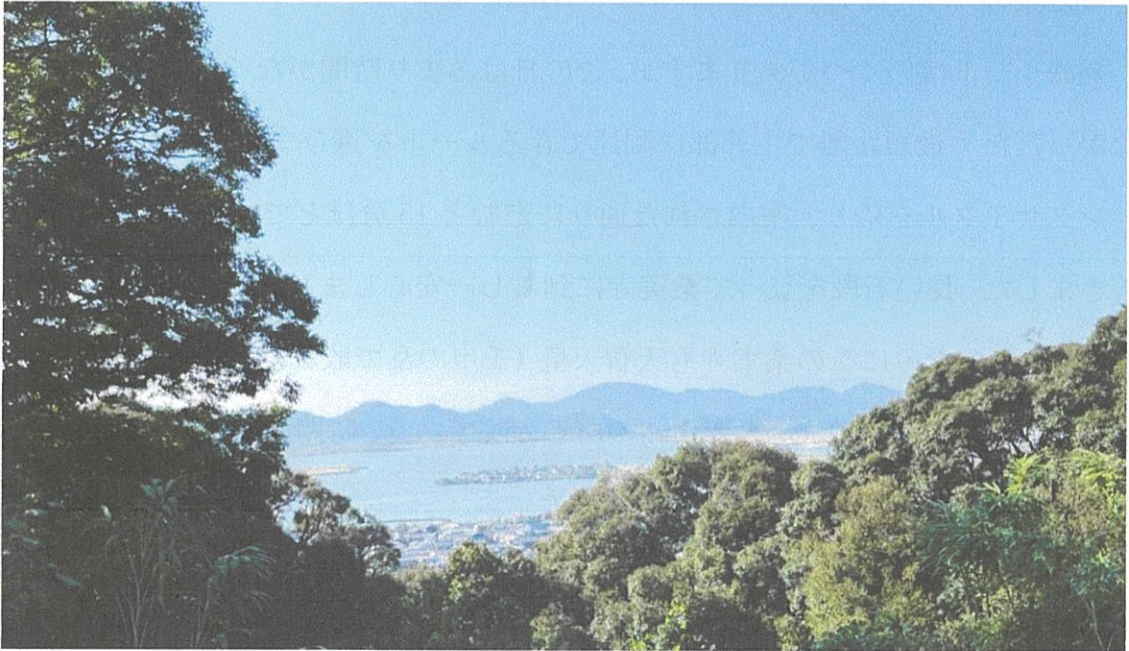
その威容はイエズス会宣教師ルイス・フロイスの『日本史』に詳しく記されているほか、後年の発掘調査では主郭部から金箔が貼られた瓦も出土しており、その存在は確かなものであったと考えられます。

現在の安土城には建物は残っておりません。しかし、発掘調査によって見つかかり、復元整備された、大手道（右の写真）には立派な石段が続き、その両側にはかつての羽柴秀吉邸跡、前田利家邸



跡などが並びます。そこを歩くと往時の繁栄を自然と想像させられます。天守台にも建物はありませんが、一面に礎石が残されており、確かにここに、フロイスが「ヨーロッパのもっとも壮大な城に比肩し得るもの」と評した天守が存在したのだと感じさせてくれます。

安土城は現在でも再建の議論がされることがありますが、財政面などの問題もあり実現には至っておりません。しかし私は、現在も確かに残る痕跡からかつての姿を想像し、想いを巡らせることにこそ魅力があるようにも感じます。むしろ、そのロマンこそが、私の城めぐりの原動力になっているような気がします。



天守台に残る礎石と付近から望む琵琶湖の景色。当時は安土山の麓まで琵琶湖が迫っていたようですが、同じ景色を信長も見ていたのでしょうか。

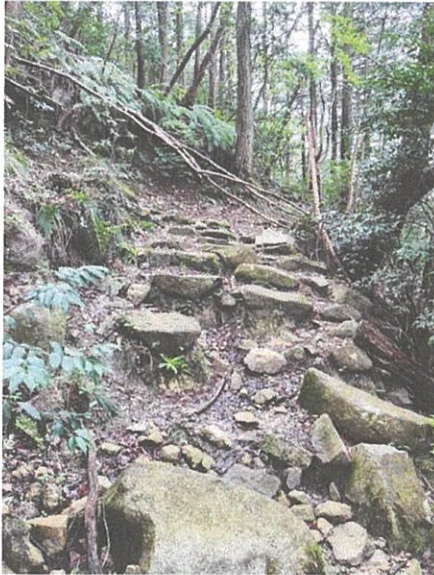
・ 観音寺城

上二つに比べると知名度に劣りますが、滋賀が交通の要所であったことを示す立派な城跡です。観音寺城は鎌倉時代初期から戦国時代にかけて近江国守護を務めた佐々木六角氏の居城でした。京と東国を結ぶ、当時の重要幹線であった東山道（後の中山道）の脇にそびえ立ち、標高 433 メートルの織山（きぬがさやま）一帯を石垣で覆う壮大な山城だったと伝えられています。しかし、上洛を目指す織田信長の侵攻を受け、観音寺城は無血開城しました。その後、山の向かいに安土城を築いた信長も観音寺城の石垣を参考にしたとも言われています。

現在も広大な範囲に石垣などの遺構が残されており、実際に訪れてみると、一度では到底見切れないほどの規模に圧倒されます。私自身も、ぜひ再訪したいと思った城の一つでした。

登城ルートはいくつかありますが、この日はあまり時間がなく、車も持っていなかったため最短距離で主郭部に到達できるルートを選びました。安土駅前レンタルサイクルを借り、案内された通りに進むと 15 分ほどで、山の麓にたどり着きました。長い石段を登って桑実寺に到着し—安心しましたが、ここからが本番でした。ちなみにこの桑実寺も天智天皇（壬申の乱で敗れた弘文天皇の父）の勅願によって創建された、大変由緒のある寺院であり、時間があればもう少し時間をかけて境内を散策したいところでした。

さて桑実寺の裏手にある登城口を教えてください、先を目指しますが、ここから



はむしろ山登りといった様相です。石段のようになった道はあるものの、一段ごとの高低差が大きく、ところどころ倒木が立ち塞がります。またこれはこちらの不注意でしたが、前日に雨が降っていたこともありところどころ道が川のようになっている有様です。そのような登山道を40分ほど登ると、突然、目の前に苔むした石垣（右下の写真）が姿を現します。ここまでの道のりが険し

かったこともあり、その感動はひとしおでした。その後も数々の遺構を見ながら先に進みましたが、中でも最大の見どころである大石垣からの景色は圧巻でした。一部では「日本のマチュピチュ」とも呼ばれているそうですが、実際に目にするその呼び名にも納得させられます。観音寺城には500を超える遺構が残るとも言われており、この訪問ではその一部しか見ることはできませんでした。それでも石垣のスケールは圧倒的で、個人的には近くの安土城跡と合わせてぜひ訪れてほしい場所だと感じています。





大石垣と、そこからの眺望。眼下には、かつての中山道に沿うようにして走る東海道新幹線が見えます。

おわりに

地元について書き始めると、自分が思っていた以上に筆が進み、改めてこの土地の歴史が好きなのだと実感しました。古くから人や物が行き交い、多くの歴史の舞台となってきた滋賀で育ったことが、今の自分にも少なからず影響しているように思います。

これまで出会った先生方の中には、数は多くありませんが、同じように城好きの先生もおられました。その中で印象に残っているのが、「旅行で城に時間をかけすぎると家族からブーイングを受ける」という話です。実際、城巡りは興味のない人からすると、ただ石垣を延々と見て歩いているようにしか見えないのかもかもしれません。

それでも、こうして毎回付き合ってくれている妻には本当に感謝しています。
(もちろん興味があって来てくれていると信じているのですが、、、)

これまで関西各地に通い、多くの経験や出会いに恵まれてきました。そして今度は海を越えて、アメリカで新しい挑戦をすることになります。留学についても、先生方をはじめ多くの方々に応援していただいております。そうした期待に少しでも応えられるようにしっかり着実に「急がば回れ」という言葉を思い出しながら、前へ進んでいければと思います。

また今回、再現性に乏しい部分もあると考え、私個人のマッチングに関する体験談についてはあまり詳しく記載しませんでした。もし今後、留学を目指す先生方でご質問などございましたら、いつでもお気軽にご連絡ください。

参考資料

大津市歴史博物館ホームページ 「大津の歴史データベース」

彦根城博物館ホームページ

安土城考古博物館、安土城天守 信長の館 資料

仁木宏・福島克彦編『近畿の名城を歩く 滋賀・京都・奈良編』吉川弘文館